

高校生の保育知識に関する研究

— 基本的生活習慣の知識を中心に —

Study on childcare knowledge of the high school student
— Mainly on the knowledge of fundamental habits —

高橋 弥生
(Yayoi TAKAHASHI)

Abstract:

In Japan there is a status quo that lowering of the declining birthrate and home child care force has become a problem. As a countermeasure, measures to foster the next generation has been erected. As part of these efforts, whether it has to promote childcare experience in the class of home economics, there is what kind of effect. In addition, whether the students to be the next generation of parents has a knowledge of what child care, revealed by their questionnaires. Particularly with regard to child care knowledge, we have studied at the center the fundamental habits that I have studied so far. As a result, child care experience but increase the impression of a child, it did not lead to increasing the child care knowledge. Also, the knowledge of fundamental habits, it found that there are differences in five knowledge. Although knowledge is high cleanliness habits, excretion and Detachable, it was not equipped with knowledge so much with respect to sleep. The result is that we would like to help in the future of nursery education.

キーワード：高校生、保育知識、基本的生活習慣、次世代育成

Keywords：high school students, child care knowledge, fundamental habits, development of the next generation

はじめに

我が国ではこれまで様々な少子化対策を策定したが少子化に歯止めはかかっていない。その上家庭での子育て力の低下が浮き彫りになってきたことで、政府は次世代を担う子どもたちを健全に育成することを目的とした少子化対策に目を向けることとなっている。それが、2003年に制定された「次世代育成支援対策推進法」である。2004年には「少子化社会対策大綱」が閣議決定され、同年その内容を推進することを目的とした「子ども・子育て応援プラン」も

策定されている。「子ども・子育て応援プラン」は、働き方の見直しやワークライフバランスに加え、小・中・高等学校における保育体験学習の重視が盛り込まれている。次世代の親を育成することにより少子化に歯止めをかけ、さらには育児力の向上を図ろうとする意図があると思われる。「子ども・子育て・応援プラン」では、「生命の大切さ、家庭の役割等についての理解」を課題として、①保育所、児童館、保健センター等において中・高校生が乳幼児とふれあう機会を提供、②全国の中・高等学校において、子

育て理解教育を推進、の2点を5年間で取り組むことを目標として活動を開始した。それにより、中学、高校における家庭科教育やキャリア教育では、保育施設でのふれあい体験が授業に盛り込まれるようになった。しかし、このプランで実施したふれあい体験は必ずしも子育てに対しての意欲を育てることにはなっていないようである。むしろメディアが発信する情報の方が高校生には伝わりやすいようで、そのため現代の高校生は将来の子育てに対して不安な気持ちを抱く生徒が多いのである。高校生がメディアの情報に揺らぐ背景には、保育体験の不足と同時に、保育知識の不足も挙げられるのではないだろうか。

そこで、本研究では筆者がこれまで明らかにしてきた幼児の基本的な生活習慣の発達基準（谷田貝・高橋、2007）を基に、食事、睡眠、排泄、清潔、着脱衣の5つの習慣について、次世代の親となる世代の高校生の保育知識をアンケート調査により明らかにすることを試みる。次世代育成といっても、具体的な対策を立てるためには対象となる者の実態を把握する必要がある。その一端としての研究として位置付けた。

1. 研究目的

高校生に対する保育教育に関する研究はこれまでも行われている。しかしながら高校生の持つ保育知識、とりわけ基本的な生活習慣に関する知識についての先行研究は見当たらない。子育てにおいて基本的な生活習慣の自立に向けての援助は「しつけ」の一環として大きな割合を占めている。それは、保育所保育指針にも基本的な生活習慣に関する内容が多く含まれていることから明らかである。ゆえに、高校生の保育知識の実態を明らかにすることには、今後の保育教育において意義があると考えられる。高校生を対象としたのは、現代の我が国の高校進学率が95%を超えており、一斉に教育を受ける最終段階であるためである。

本研究は、幼児の基本的な生活習慣の発達基準を基に、食事、睡眠、排泄、清潔、着脱衣の5つの習慣について高校生の知識をアンケート調

査により明らかにし、そこで得られた結果を次世代の親になる可能性を持つ高校生に対する保育教育を検討するための資料とすることを目的としている。

2. 先行研究の分析

高校生に対する保育教育に関する研究として基盤となっているのは牧野らの研究であろう。牧野ら（1989a,b,c）は、親になる準備状態（親準備性）を測定する尺度を作成し、準備状態の形成に影響を与える要因を分析している。それによると、中学以降の乳幼児との接触や好ましい家族関係、そして保育教育を受けた経験などが準備状態を高めるとしている。さらに、「子どもが好き」という感情を育てることが大切で、そのためには乳幼児と触れ合う経験を増やす必要があると提言している。現在の家庭科教育が乳幼児とのふれあいを重視したカリキュラムとなった基となる研究である。

牧野らの研究後、主に家庭科教員や家政学の研究者による保育教育の研究が進められている。伊藤（2003）は、若者の変化に伴って保育教育も見直す必要があるとし、そのためにこれまでの家庭科教育において親準備性（伊藤は親性準備性と呼んでいる）がどのように取り扱われてきたかを明らかにし、戦後の母親準備教育から現在の男女共修で親準備教育を受ける時代に変化したことで、今後の保育教育について検討が必要であるとしている。藤後（2004）も、これまでの家庭科の保育教育に関する先行研究を概観し、保育教育の課題を明らかにしようと試みており、今後は生徒が主体的に課題を解決する力を養う教育として、地域社会の人との交流や対話を取り入れていく必要があることを述べている。

家庭科教員を対象にした研究としては、岡野ら（2005）がある。岡野らは家庭科教員へのアンケート調査により、保育体験学習の実施率や、保育教育に対する考えなどを分析している。それによれば、保育体験学習を実施した経験のある教員は57.7%にとどまっており、保育領域の授業に関しても得意感のある教員とそうではない教員との間に意識の差があることを明

らかにしている。

先行研究からは、高校家庭科における保育教育の重要性が明らかになっているものの、その内容の扱いについては教員間でも差があり、親準備性が高まる内容とはなっていないことが明確になっている。乳幼児とのふれあい体験学習や、ロールプレイによる学習など、授業内容が検討されているものの、どのような授業であっても、教員の指導力による差が生じてしまう可能性は否定できない。次世代の親を育成するためには、現状では及んでいない細かい部分の指導が必要になってくるのではないだろうか。

これまでの保育教育に関する先行研究において、基本的な生活習慣に着目した研究は見られない。しかしこれまで述べたとおり、基本的な生活習慣は乳幼児期に身に付けるべき大切な習慣である。その習慣の獲得が順調にできるための方法を、高校生が学ぶ意義は高いのではないだろうか。

3. 調査概要

本研究は、次世代の親になる高校生に対する保育教育を検討することが目的であるので、基本的な生活習慣に関する質問については将来親になった時に備えておくべき知識を中心に作成した。ただし、できるだけわかりやすく、回答しやすい形式になるように心がけたつもりである。これらの設問に対して高校生がどのような理解をしているのかについて、アンケートを分析することで明らかにしていく。

(1) 調査対象

神奈川県内の公立高校3校1年生～3年生、男女（うち、2校は普通科、1校は工業高校）、東京都私立高校1校（普通科）1年生～3年生、男女

調査の人数分配は下表のとおりである。

	男子	女子	合計
1年生	429	579	1008
2年生	166	242	408
3年生	162	154	316
合計	757	975	1732

配布は4校で2160通、回収は1751通、有効回答数1732通、有効回答率は80.2%であった。

(2) 調査時期

平成25年7月から8月

(3) 調査内容

調査内容は下記の通りである。

①家庭科における保育教育の受講経験、②乳幼児に関わった経験、③保育現場での実習やボランティアの経験、④乳幼児の存在、⑤乳幼児に対する印象、⑥子育てに関する考え（5問）、⑦食事の習慣に関する質問（7問）、⑧睡眠の習慣に関する質問（8問）、⑨排泄の習慣に関する質問（9問）、⑩清潔の習慣に関する質問（6問）、⑪着脱衣の習慣に関する質問（4問）

4. 調査結果

(1) 高校生の保育体験の状況

高校生の保育に関する授業の受講経験や子どもとの関わり経験について、全体像をとらえておくために、男女、学年、を区別せず、全体の合計で割合を出した結果を以下に示す。

①保育に関する授業の経験

これまでに保育に関する授業の受講経験がある高校生は全体の58.2%である。逆に、受講経験がない23.4%、または記憶がない18.3%となった。中学校の学習指導要領では、保育教育が含まれており、受講していないはずはないのであるが記憶に残っていない生徒もいるようである。記憶に残っていないとすれば、受講していないことと同様の状態であると考えられる。中学校での授業形態や授業内容などに不十分な点が在ることも考えられるが、今回の調査では「記憶なし」に未受講がどの程度含まれているのかは明確にすることはできない。

②乳幼児と関わった経験

これまでに乳幼児と多数回関わった経験がある生徒は57.5%、数回関わった経験がある生徒は28.9%であった。全く経験がない生徒は13.9%と少なく、学校の授業での実習やボランティア体験、職業体験などを通して何らかの形で乳幼児と関わる経験をしている生徒が多い。多数

関わった経験がある生徒の57.5%について、少子化といわれる現代においては一見高いようにも解釈できるが、どのような場面での関わりなのか、関わりの質までは今回のアンケートでは明らかにできない。乳幼児との関わり経験がほとんどない生徒にとっては、家庭科の授業だけで教科書の内容を理解することは困難であると予想される。

③保育現場での実習やボランティアの経験

保育実習やボランティア経験に関しては、5回以上経験がある生徒は6.3%、1～4回の経験は42.4%で、半数以上の51.6%が経験をしていない。中学家庭科では保育現場での実習などを実施することを推奨しているが、実際にはその実施が困難であることから、このような結果が生じていると考えられる。高橋ら（1981）によれば、実習が困難な理由の80%は時間が不足していることであるとしている。また最近の研究では、時間不足の問題以外にも、人数が多すぎて受け入れてもらえない、担当教員の人数が少なくて実施できない、といった原因もあげられている（伊藤, 2007）。なお、5回以上ある、と回答している6.3%については、保育に特化した科目を選択している生徒である可能性が高いと考えられる。

④乳幼児の存在

身近に乳幼児の存在があるという生徒は42.1%、身近に乳幼児の存在がない生徒は58.1%である。親戚や家族に乳幼児がいる場合、実習やボランティアの経験が少なくとも、その代わりとなる経験ができるのではないかと予想したが、身近にいる乳幼児とどのようなかわりを持っているかは明らかではない。身近に乳幼児が存在する生徒が42.1%という数字は、意外に多いとも解釈できるが、6割の生徒が身近に乳幼児の存在がないということは、やはり保育の授業を受講する際には子どもに対する理解が深まりにくいことも考えられるだろう。

⑤乳幼児に対する印象

乳幼児に対する印象は、「とてもかわいい」と「かわいい」を合計した割合が72.7%となり、乳幼児に対して好印象を抱いている生徒が比較的多いことが明らかになっている。一方、乳幼

児に対して良い印象を持っていない割合は7.0%にとどまっている。倉持ら（2011）は、女子生徒のほうが乳幼児に好印象を持ちやすい傾向があることや、共学校の男子生徒は男子校の男子より乳幼児に対して好印象を持っているという報告をしている。今回の調査対象となった高校は、工業高校を含めすべて共学であることや、女子の回答数がやや多いことも、この結果に影響を与えていることが考えられるだろう。

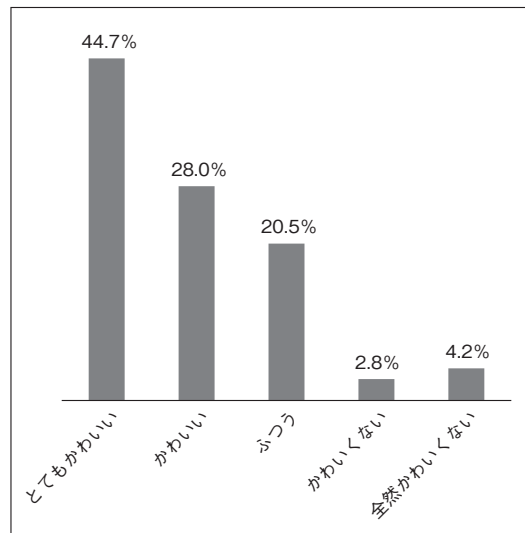


図1 乳幼児に対する印象

(2) 高校生の子育てに関する考え

子育てに関する考えを問う設問は5問あり、高校生の子育てに対する考えの概要をとらえるための内容となっている。結果は表1の通りである。なお表1～表6は、各質問の回答の最高値を網掛けで示している。

表1を見ると、高校生の75.7%が将来親になりたいと思っていることがわかる。また、子育てに関する知識も50.6%がもっと学びたいと感じている。平成21年に横浜市が中学・高校生を対象とした同様の調査では、高校生の69.6%が将来親になりたいと回答している。今回の調査結果は、これらの数値よりやや高い割合であった。子育てに関する知識を学びたいと感じる生徒が55.6%いることから、調査対象となった高校生は比較的に子育てに意欲がある生徒が多かったと分析することができる。

実際に子育てが上手にできるかどうかという点に関しては、高校生には未知な部分が多いためか、上手にできると感じている生徒は32.9%、できないと感じている生徒が24.1%であり、どちらともいえないと回答した生徒が最も多い43.1%であった。上手にできると回答している生徒は、何らかの保育体験があると推察することができる。また、「子育ては社会全体でやるべき」という質問に対する回答については79.9%の生徒がそうであると回答している。子育てに対する不安感を示すものとしては、子育ての知識をもっと学びたいとする生徒が前述の通り約半数いることが挙げられる。高校生の多くは将来親になりたいと考えているものの、現在の状態では子育てに不安があり、自分だけでは育てられないかもしれないので社会全体で支えてほしいと思っていると推察することができるのではないだろうか。

保育所の利用希望については意外に低く、「子どもが小さいうちから保育所に預けたい」という生徒28.2%に対し、「預けたいと思わな

い」と回答した生徒が37.9%となり、約10%多かった。子育てに関しての理想と現実が一致していないのは当然であるが、子育てには不安があるものの、自分の子どもを自分で育てたいという気持ちを持っている生徒が少なくないことがわかる。今回のアンケートでは、高校生自身が幼児期に幼稚園に通っていたのか保育所に通っていたのかを調べていない。自らの経験を踏まえて、自分の子どもを保育所に預けるかどうかを考えていることも想像に難くないので、今後アンケート調査を実施する場合には、この点について明らかにしておく必要を感じる。

(3) 基本的な生活習慣に関する保育知識

① 食事の習慣に関して

食事の習慣に関する設問は7問あり、表2にその結果を示した。高校生が比較的常識的な考えを持っていることがうかがえる結果となった。

No. 6～9は、食事の親の態度やマナーに関する質問である。これについては好ましいと思われる回答に8割以上が集中している。高校

表1 高校生の子育てに関する考え

No	とても思う	少し思う	どちらでもない	あまり思わない	思わない
1 将来親になりたい	49.9%	25.8%	14.4%	5.5%	5.1%
2 知識をもっと学びたい	20.6%	35.0%	29.7%	8.8%	6.5%
3 上手に子育てできるとおもう	10.7%	22.2%	43.1%	16.3%	7.8%
4 子育ては社会全体でやるべき	34.3%	35.6%	24.3%	4.2%	1.8%
5 自分の子どもは保育園に入れる	13.7%	14.5%	34.0%	23.3%	14.6%

表2 食事の習慣に関する知識

No	とても思う	少し思う	どちらでもない	あまり思わない	思わない
6 親は子どもと一緒に食事をするべき	70.7%	19.1%	8.3%	1.4%	1.0%
7 親は食事中にゲーム・携帯はやめるべき	66.9%	16.9%	11.4%	2.4%	2.8%
8 親は箸の使い方やマナーを身につけるべき	76.0%	16.5%	6.7%	0.6%	0.5%
9 子どもに箸の使い方やマナーを教えるべき	75.5%	16.0%	6.9%	0.9%	1.1%
10 子どもの好き嫌いは直す必要はない	9.3%	18.5%	25.8%	25.3%	21.5%
11 食事時間が長くなっても全部食べるべき	32.3%	31.7%	27.2%	7.2%	1.8%
12 手作りでなくても栄養が大切	18.5%	23.5%	36.6%	15.9%	5.8%

生が描く食事の中の好ましい親の姿は、「正しい箸使いでマナーよく子どもと一緒に食事をし、食事中はゲームや携帯などはやらない」というものである。子どもの生活科学研究会の調査(2010)によれば、実際に正しい箸使いができる高校生は18.3%であるが、正しく持つべきであるという意識は強いようである。また、現在の高校生の生活の中では携帯電話やゲーム機は切り離せないものであるが、子どもと食事をする際はそれらを止めるべきであると判断しているようである。箸使いやマナーに関しては、子どもにも正しく身につけさせたいと考えている生徒が90%を超えている。アンケート対象となった高校生が幼児期には正しい持ち方を身につけるためのしつけ箸が販売されており、箸使いを正しくするという意識は家庭にもかなり浸透していた。そのような背景が、現在の高校生の意識に働いているものと考えられる。

食事のマナーや行儀などに関する質問については高い意識が見られたが、子どもの好き嫌いや食事時間に関しては正しい回答に偏ることはなかった。No.10は子どもの好き嫌いに対してどのように考えるかを示している。これを見ると、子どもの好き嫌いは直したほうが良いとする生徒は46.8%、一方好き嫌いは直さなくてよいと考えている生徒は27.8%であった。約3割の生徒が子どもの好き嫌いを直す必要はないと考えているが、この生徒たちは好き嫌いを無理やり直そうとするイメージを持っているのかもしれない。そうであるなら、好き嫌いを作らないためにはどうしたらよいか、といった保育教

育が有効になるのではないだろうか。

子どもの食事に対して、高校生の考えがずれているのがNo.11である。谷田貝・高橋(2007)によれば、現代の幼児の食事時間の平均は27.9分となっている。保育所などのような保育施設においても、子どもの食事時間は30分以内に抑えるようにしている。乳幼児の食事に長い時間をかけることは、遊び食べになりやすいことや次の食事への影響を考え、好ましいこととはされていない。しかし高校生の回答では、食事時間は長くなっても全部食べることのほうが大切であると64.0%が思っている。食事時間は長くないほうが良いと回答している生徒は、わずか9%である。高校生にとっては「全部食べさせる」ことが大事であると考えているようである。

さらにNo.12は子どもの食事を手作り優先にするか栄養優先にするか、という質問であるが、手作りが良いと考える高校生が42.0%、栄養に重点を置くという高校生が21.7%であった。半数近くは手作りを優先しているものの、20%以上が手作りでもなくても栄養が大切であると考えている。美味しくて手軽な食事がいつでも手に入る社会となり、高校生自身も市販の食事をする機会が増えていると推測できる。しかし手作りということはその家庭の味が食卓にあるということで、食事文化を繋ぐことでもある。子どもにとっての食事は栄養補給のためだけでなく、それ以外の意味を含んでいることを保育教育の中で伝える必要性を感じる。

②睡眠の習慣に関して

睡眠の習慣に関するアンケートの結果を表3

表3 睡眠の習慣に関する知識

No	とても思う	少し思う	どちらでもない	あまり思わない	思わない
13 睡眠に特別なしつけは不要	11.2%	21.4%	33.1%	23.7%	10.8%
14 親子ふれあいでの夜更かしは良い	4.0%	6.8%	21.7%	36.3%	31.3%
15 夜更かしの翌日は昼寝を長くする	6.8%	12.1%	35.9%	27.2%	17.7%
16 寝かしつけは難しい	27.4%	36.7%	26.5%	6.8%	2.9%
17 親は添い寝をした方が良い	28.3%	33.9%	30.7%	4.5%	2.9%
18 親が毎朝起こすのが良い	7.3%	18.4%	42.6%	20.9%	10.8%
19 学校に行くようになれば自然と起きる	11.0%	21.8%	31.2%	23.0%	11.8%

に示した。

アンケートからうかがえる高校生の実態としては、睡眠については自らの子ども時代の体験を超える知識はほとんどないということである。正答に高校生の回答が集中したのは、「親子のふれあいのための夜更かしはしてもよいと思う」「親は添い寝をしたほうが良いと思う」という2問だけである。

親子のふれあいのための夜更かしを是とするか否とするかについて、夜更かしはよくないと回答している高校生は67.6%である。夜更かしをしても良いとした高校生が10.8%しかいないことから、親子の触れ合いのためであっても夜更かしはしないほうが良い、という認識を持っている高校生が多いということになり、子どもの就寝の習慣については正しい認識を持っていることがわかる。添い寝については、62.2%が「したほうが良い」という回答で、「しないほうが良い」と回答した生徒は、わずか7.4%であった。日本の就寝のイメージとして、川の字で添い寝をしながら眠るという姿が、高校生にも印象づいている可能性が考えられる。もしくは、自らが添い寝をしてもらった体験による回答であったかもしれない。

もう一つ高校生の意識が明確に示されたのは「寝かしつけは難しい」という質問であった。これについては、「とてもそう思う」「そう思う」の合計が64.1%となり、寝かしつけは難しくないと感じているのはわずか9.6%であった。この点については高校生の意識が一致しているようで、寝かしつけは難しいと感じている高校生が多いといえる。子どもを寝かしつける経験をした高校生は少ないと思われるので、なぜ高校生が寝かしつけを難しく感じるのかその理由は定かではない。ただ、メディアから発信される情報などから難しいと感じているのかもしれない。また、「寝かしつけ」という言葉が「しつけ」を連想させるために、難しいという先入観を持ってしまっても考えられる。

この3つの質問以外は、どの問題も「どちらでもない」という回答が最も多くなっており、高校生自身ではまだ答えが出せないといった状況もうかがえる。特に、起床に関するしつけの

質問である「親が毎朝起こすほうが良い」「学校に行くようになれば自然と起きる」の相反する2問について、同じような分布の状態となった。No.18, 19が示すように、回答に良し悪しをつけない「どちらでもない」が最も多く、「そう思う」と「思わない」がほぼ同率となっている。

心配な結果となっているのはNo.13である。睡眠に特別しつけは不要であると考える高校生が32.6%いるということである。つまり、高校生の約3割が子どもは自然と眠るものだと勘違いをしている可能性があるということである。また、どちらでもないとの回答も33.1%あり、高校生の6割が睡眠のしつけについて正しい知識を備えていない状況である。子どもの睡眠は、成長をするために必要な営みで、大人の睡眠とは全く違う意味を持っている。子どもにとって夜間に十分な睡眠時間を確保することの重要性や、毎日同じ時間に眠り生活リズムを整えることの必要性を、高校生に理解させることは非常に重要である。今後、保育教育の中に子どもの睡眠に関する科学的な正しい情報を盛り込む必要があるだろう。

③排泄の習慣に関して

排泄の習慣に関するアンケートの結果は、表4およびグラフ2に示した。排泄の習慣に関する結果は、あまり好ましくない傾向も見られる。

排泄の習慣に関しても、実際に子どもの排泄の世話をした経験がある高校生は少ないと考えられる。そのため自らの経験により判断できる質問に関しては、回答がある程度集中する形となった。質問項目としてはNo.22「和式トイレを使えるように教える」、No.26「毎日うんちをしなくても良い」、No.27「お尻の拭き方を教えたほうが良い」の3問がこれに該当する。

和式トイレに関しては、使えるようにしたほうが良いと考える生徒が59.3%であった。現代は、各家庭のトイレのほとんどが洋式になっている。しかし、学校や外部の施設などではまだまだ和式のトイレも多く存在する現状がある。ゆえに和式トイレの使い方を知り、使えるようになっておくことは必要なことと感じているよ

表4 排泄の習慣に関する知識

No	とても思う	少し思う	どちらでもない	あまり思わない	思わない
20 オムツ外しは難しい	22.0%	40.9%	25.3%	9.3%	2.4%
21 おもらしは叱った方が良い	6.6%	24.9%	38.5%	21.3%	8.6%
22 和式トイレを使えるように教える	23.4%	35.9%	30.5%	5.9%	2.6%
24 紙オムツの方が布オムツより良い	10.2%	16.0%	60.1%	7.1%	4.4%
25 早くからオムツ外しのしつけをするのが良い	19.2%	36.1%	36.4%	5.3%	2.4%
26 毎日うんちをしなくてもよい	3.4%	6.4%	23.9%	34.8%	31.1%
27 お尻の拭き方を教えたほうが良い	32.2%	37.4%	24.2%	3.7%	2.1%
28 トイレのしつけは保育園でやった方が良い	8.4%	17.7%	45.5%	20.0%	7.8%

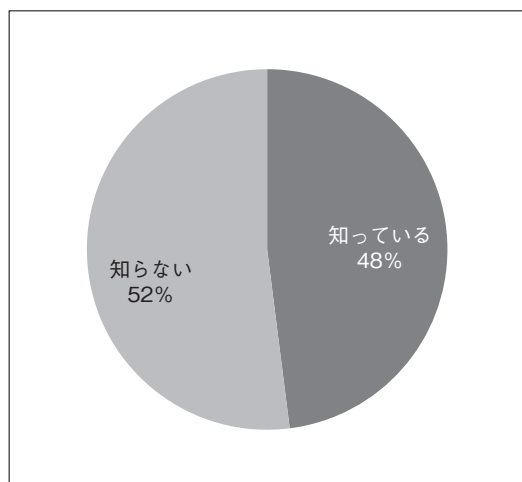


図2 布オムツを知っているか

うである。お尻の拭き方を教えることについては、69.6%の生徒が教えたほうが良いとしている。設問の内容が具体的で、回答しやすかったのかもしれないが、排泄の習慣の設問の中では正解の回答率が最も高い。

毎日の排便については、他の設問に比べると正答率は高い方であるが、疑問の残る結果である。高校生にもなれば排泄の意味を理解しており、毎日の排便が重要であることを知識として知っているはずである。しかし、毎日うんちをしたほうがよい、と考える高校生が65.9%であったことはやや低い値であるといえるのではないだろうか。毎日うんちをしなくてもよいと考えている生徒が9.8%、どちらともいえないが

23.9%もいるということは、子どもの健康に関する知識の不足を感じざるを得ない。

トイレトレーニングに関する質問については、回答がばらつく傾向にあった。特に「おもらしは叱ったほうが良い」「トイレのしつけは保育園でやったほうが良い」の2問については、「どちらでもない」の回答が最も多く、「思う」「思わない」が同じような割合となった。「トイレのしつけは保育園でやったほうが良い」という質問については、保育園でしつけるほうが良いと回答したのは26.1%にとどまった。

「おもらしは叱った方が良い」という設問の回答については、叱った方が良いと考える高校生が31.5%であった。どちらでもないという回答も38.5%であることから、7割ほどの高校生はおもらしを叱ってはいけないということを知らないという実態が明らかになったのである。おもらしは、子どもの心身の発達の未熟さゆえの現象である。そのため、おもらしを叱ることは子どもの精神的な発達にマイナスの影響を与えることを、保育教育の中でしっかりと教えるべきであろう。

布オムツに関しての設問については、図2の通り高校生の約半数が布おむつを知らないという状態であるため、回答に関してはあまり有効ではないと考えられる。紙オムツと布オムツの比較についても、60.1%がどちらでもないと回答しているのは、布オムツを知らないために比較できないと解釈するのが自然ではないだろう

か。

意外だったのは、「早くからオムツ外しのしつけをする」についての回答であった。早くからしつけたほうが良いと回答した高校生は、55.3%で半数を超えている。どちらでもないが3割ほどいるものの、早くしつけないほうが良いと回答したのはわずかに7.7%であった。現代の幼児のオムツ離れは、谷田貝・高橋(2007)によれば3歳6か月である。山下(1953)が調査を行った1936年は、2歳0ヶ月にはほとんどの子どもがオムツを使用しなくなっていたので、オムツ離れは遅くなる傾向にある。高校生がオムツ外しを早くしつけたほうが良いと考える根拠は今回のアンケートから探ることはできないが、排泄の習慣に関する回答を俯瞰すると、排泄の習慣に対する高校生の知識が少なく、排泄の習慣の大切さについて理解できていない様子が見える。

④清潔の習慣に関して

清潔の習慣に関するアンケートの結果を、表5に示した。清潔の習慣は、他の習慣とは明らかに違う傾向が見られた。

日本は非常に衛生観念が高い国で、清潔に対して非常に敏感である。清潔を保つための抗菌に関する商品も、生活の中に多く出回っている。当然のことながら高校生自身もそのような商品を使用する機会があるだろう。現在高校在学の生徒が幼児期を過ごしたのは平成10年ごろであるので、自分自身が育ってきた環境もかなり清潔な状況であったことが想像できる。そのような高校生が、清潔の習慣に関してどのような知識を持っているのかが、表5である。

これを見ると、清潔の習慣はほかの4つの習慣とは違う傾向が見られる。清潔の習慣については、すべての質問に対して、正解に集中したのである。つまり、高校生全体が同じような認識をし、同じような知識を持っているということになる。

その中でも、歯の衛生に関しては非常に高い意識と正しい知識を持っていることがわかる。No.29, 33, 34は歯の衛生に関する結果である。特に虫歯に対しては、「虫歯にたくない」と思う高校生が85.6%と高い値となっている。また、たとえ乳歯であっても歯磨きが必要であると考えている高校生も81.9%に上る。自分自身が家庭で受けた歯磨きのしつけが、今回の回答に影響を与えていると考えられる。また、学校教育においても歯の健康指導は毎年実施され、検診も実施されている。歯の健康に関しては社会全体の意識も高く、高校生も同様の高い意識を持っているということがいえる。

子どもらしい生活と清潔の習慣とのかかわりについてどのように高校生が考えるかを表しているのが、No.30, 31, 32である。非常に清潔志向が高い高校生なので、子どもが汚れることや、汗をかくことを嫌う傾向があるのではないかと予想していたが、予想に反して汚れを嫌う傾向はうかがえなかった。手足が汚れたり、汗びっしょりになったりして遊ぶことを否定する高校生は1割に満たない結果となった。

⑤着脱衣の習慣に関して

着脱衣の習慣に関するアンケートの結果について、表6に示した。

着脱衣の習慣に関しての質問では、「どちら

表5 清潔の習慣に関する知識

No	とても思う	少し思う	どちらでもない	あまり思わない	思わない
29 乳歯の歯磨きは不要	3.0%	2.2%	12.2%	20.7%	61.2%
30 泥んこ遊びは不衛生	4.2%	5.1%	23.0%	27.2%	40.0%
31 服や手、体が汚れる遊びは不衛生	3.8%	4.2%	20.4%	29.7%	41.4%
32 夏に汗びっしょりはよくない	4.0%	4.8%	16.6%	30.0%	44.1%
33 食後の歯磨きはしっかりやる	55.0%	24.8%	13.9%	2.5%	2.9%
34 虫歯にたくない	66.8%	18.8%	11.8%	1.1%	1.2%

表6 着脱衣に関する知識

No	とても思う	少し思う	どちらでもない	あまり思わない	思わない
35 おしゃれな服を着せたい	34.6%	26.0%	31.9%	4.3%	2.9%
36 着替えは先生が教えたほうがよい	6.8%	10.4%	44.5%	23.8%	14.1%
37 ボタンやひもの服は着せないほうがよい	5.7%	10.0%	34.9%	28.6%	20.4%
38 子どもの着替えは手伝う	4.4%	9.2%	41.2%	30.3%	14.2%

でもない」という否定でも肯定でもない回答に意見が集中した。特にNo.36, 38のように、子どもの着替えに対してどうするべきか、という質問については40%以上が「どちらでもない」と回答している。No.36は「子どもの着替えは幼稚園や保育所の先生が教えたほうが良いと思う」という質問であるが、思わない、つまり家庭で教えるほうが良いと考えている高校生がやや多いものの「どちらでもない」が44.5%と半数近くを占める。また、No.38は「子どもの着替えが遅いときは親が手伝って早く終わらせるのが良いと思う」という質問に対する回答で、そうは思わない高校生が44.5%ではあるが、「どちらでもない」高校生が41.2%と、同じような割合を示している。この2問から、子どもの着替えについてどのように対応したらよいかという知識はあまり備えていない様子がわかる。しかし子どもが一人で着替えができるまでにはいくつかの段階があり、その中で子どもは手指の巧緻性や意欲、達成感など発達に必要な様々なものを身につけるのである。そのことが理解できるようになると、子どもの着替えにイライラしたり、叱ったりする必要はなくなるだろう。着脱衣に伴う子どもの発達を理解できるような保育教育を考えることも大切なことなのであろう。

着脱衣の習慣で際立っていたのが、No.35の「自分の子どもにはおしゃれな服を着せたいと思う」という質問に対する回答であった。これについては、おしゃれな服を着せたいと思っている高校生が60.6%となり、現代の高校生の意識がはっきりと表れる結果となった。高校生自身がおしゃれに気持ちが向く年頃でもあることから、自分がおしゃれをするように子どもも着飾りたいと考えるのかもしれない。かわいい服

を着せたいと思う気持ちを否定する必要はないが、子どもの発達に即した子ども服がどのようなものであるかを教える必要はあるだろう。ただし、今回のアンケートからは明らかにできないのではあるが、子どもをかわいく着飾りたいという意識が強いようであるなら、あまり好ましいことではないといえる。子どもにとって優先されるのは、動きやすく快適な服である。さらにおしゃれより清潔な服である。このあたりの高校生の意識については、今後研究を深めていく必要があると感じる。

5. 考察

(1) 5つの基本的生活習慣による比較

ここでは、高校生の子育て知識が5つの基本的生活習慣それぞれについて差があるかどうかを比較するために分散分析を行った。なお、5つの習慣については、標準偏差の平均値により比較をしている。最も好ましい回答が5点、最も好ましくない回答が1点になるように置き換えをしたため、知識が備わっているほど点数が高くなる。

その結果、 $F=1769.33$ 、 $p<0.001$ となり、有意差が認められた。Bonferroniの多重比較の結果、排泄の習慣と着脱衣の習慣には差が認めら

表7 習慣による知識差

習慣	平均値	標準偏差	F
食事	3.77	0.57	1769.33
睡眠	3.37	0.58	
排泄	3.06	0.45	
清潔	4.15	0.83	
着脱衣	3.05	0.74	

有意確率を記載

れないが、それ以外の習慣についてはそれぞれの間に差が認められる。

これによると、高校生の基本的生活習慣に関する知識には、習慣ごとに差があり、最も数値が高いのは清潔の習慣である。次に高い値を示しているのは食事の習慣であり、食事の習慣と清潔の習慣には $p < 0.05$ で有意差が認められるので、清潔の習慣はほかの習慣に比べ、知識が最も備わっている習慣であるということが出来る。

また、食事の習慣と、次に値の高い睡眠の習慣の間にも $p < 0.05$ の有意差がある。そのため、食事の習慣については、清潔の習慣に次いで知識が備わっているということが出来る。食事の習慣の次に数値の高い睡眠の習慣に関しても、同様に $p < 0.05$ となり有意差が認められる。睡眠の習慣の次には、排泄と着脱衣の習慣が同じ数値となっており、睡眠の習慣と排泄及び着脱衣の習慣の間には、やはり $p < 0.05$ の有意差が認められる。つまり、高校生の持つ基本的生活習慣に関する知識は習慣によって差があり、知識が備わっている順に、清潔、食事、睡眠、排泄と着脱衣、ということになるのである。基本的生活習慣の知識といっても、5つの習慣について差があることが明確になったわけである。

この結果は、今後高校生の保育教育を行う際に、どの習慣について詳しく説明すべきか、どの習慣についての知識を補えればよいか、について示唆を与えるものとなったと考える。

生理的基盤に基づく習慣である食事、睡眠、排泄の習慣については、正しい知識を持つことが子どもの発達を保障することにつながる。しかしながら、アンケートの結果では必ずしもそれらの知識が備わっているとは言えない状況である。本来であれば、食事、睡眠、排泄の習慣に関する知識量が多くなる方が好ましいのである。しかし、最も値が高いのが清潔の習慣であることは、高校生の子育てに関する意識や関心の偏りを示すものであると感じる。

(2) 基本的生活習慣の知識

今回のアンケートから、基本的生活習慣に関する知識の中でも特に子育てにおいて学ぶ必要がある項目が明らかになった。それは、ア) 好き嫌いと食事時間について、イ) 睡眠のしつけについて、ウ) オムツ外しについて、の3点である。以下前述の内容と重複する点もあるが、高校生の現状を確認しておくこととする。

ア) 好き嫌いに関しては、直す必要がないと考えている生徒が3割、どちらでもないという回答も3割弱いることから、現代の高校生は好き嫌いを無理に直す必要はないと考えている。もちろん好き嫌いは無理に直さなくても良いが、好きな物だけしか食べないという状況になることは避けたい。また食事時間に関しては、全部食べるために食事時間が長時間に及んでも良いと考えている生徒が6割を超えており、食事時間が長引くことによる悪影響についての知識がないことが明らかである。

イ) 睡眠のしつけは不要であると考えている生徒が約3割であった。どちらでもないと答えている生徒も3割おり、子どもにとっての睡眠の重要性が理解されていない。

ウ) オムツ外しに関連する項目として、オムツ外しはなるべく早くからしつけた方が良く考えている生徒が5割以上おり、さらにおもらしは叱った方が良く考えている生徒が3割存在する。オムツを早くから外そうとすれば、おもらしは避けられないだろう。おもらしを叱ることによる弊害を全く知らないというのが高校生の現状である。

以上の3点については、親になる前の段階で正しい知識を持つべきである。3点とも幼児の心身の発達に深く関連しており、これらの知識を持たないことによる弊害は決して小さくない。高校家庭科の保育教育において、詳しく学ぶ機会が必要であろう。

おわりに

今回のアンケート調査を通して、高校生の持つ保育知識の一端が確かめられた。中学・高校における家庭科の保育教育には限界があり、次世代の親となる可能性をもつ子ども達に保育知識を十分に備えることは現状では不可能である。高校生が継続的に幼児期の子どもに触れ合える環境が必要であり、今後作られる保育施設や子育て支援施設などに、高校生が関わることのできる方法を考える必要があるだろう。そのことが、少子化や家庭における育児力の低下を防ぐことにつながるのではないだろうか。

最後に今回の調査にご協力いただいた高校に心より感謝したい。

【参考文献】

- ・伊藤葉子（2003）保育教育の変遷と親性準備性。千葉大学教育学部研究紀要51. 147-154
- ・伊藤葉子（2007）中・高校生の家庭科の保育体験学習の教育的課題に関する検討。日本家政学会誌58（6）. 315-326
- ・岡野雅子・宮澤愛・赤塚みのり（2005）高等学校家庭科「保育領域」についての現状と課題—長野県家庭科教員に対する調査から—。信州大学教育学部紀要114. 13-24
- ・倉持清美・伊藤葉子・堀内かおる（2011）男子高校生の価値化保育教育の課題。東京学芸大学紀要総合教育科学系62（2）. 219-227
- ・厚生労働省（2008）平成20年告示保育所保育指針。フレーベル館
- ・子どもの生活科学研究会（2010）鉛筆と箸の持ち方・使い方の実態に関する調査研究報告書。子どもの生活科学研究会発行
- ・高橋光子・山崎甲子・長尾忠子・福田公子（1981）高等学校における保育教育の研究（第9報）実践的・体験的学習に関する実態調査（9）。日本家庭教育学会誌24（2）. 56-61
- ・藤後悦子（2004）家庭科教育「保育」研究における動向。日本家庭科教育学会誌47（2）106-115
- ・牧野カツコ・中西雪夫（1989a）高校生の『親になることへの準備状態』と保育教育（第1報）—「準備状態」の測定尺度の作成—。日本家庭科教育学会誌32（2）. 51-53
- ・牧野カツコ・中西雪夫（1989b）高校生の『親になることへの準備状態』と保育教育（第2報）—「準備状態」の測定尺度の作成—。日本家庭科教育学会誌32（2）. 55-59
- ・牧野カツコ・中西雪夫（1989c）高校生の『親になることへの準備状態』と保育教育（第3報）—「準備状態」の測定尺度の作成—。日本家庭科教育学会誌32（2）. 61-65
- ・谷田貝公昭・高橋弥生（2007）データでみる幼児の基本的な生活習慣 基本的な生活習慣の発達基準に関する研究。一藝社
- ・横浜市子ども青少年局企画調整課（2009）中・高生の生活に関する意識調査報告書。